

* 京都府知事賞

「ふるさとを守るには」

亀岡市立東輝中学校 2年
人 見 文

「おいしい。」みなさんは空気を吸ってそう思ったことがありますか。私の住んでいる亀岡市は、自然が身近に感じられる緑豊かな町です。目の前に広がる緑のじゅうたんのよう田んぼ。時折吹く爽やかな風。生まれた時から亀岡に住んでいる私にとっては、全てが小さい頃から変わらない当たり前のものでした。しかし、中学校に入学して部活などで京都市内に行くことが多くなってから、私はある疑問を持ち始めました。それは、田んぼが京都市内には、全くと言っても良い程ないことです。前を見ても横を見ても目に入ってくるのは大勢の人や自動車ばかり。自然に囲まれて生きてきた私にとってはそれがすごく忙しそうに見えました。先生から「職場体験」のことを伝えられたのは、そんなことを考え始めて数ヶ月たったある日のことでした。内容は、「3日間自分で決めた職場に行き、仕事を体験する。」というものでした。50程、選べる職場があったのですが、自然と緑の大好きな私は真っ先に「京都府農林水産技術センターにしよう。」と決めました。

農林水産技術センターでは、電気柵の設置、田植え、野菜の収穫、麦の脱穀をしました。センターの中は、作物部、環境部、園芸部に分かれており、それぞれ担当の仕事を行います。私は、全員で一つのことをやっていると思っていたので、「農業」と一言で言ってもいろんな分野があるのだなということを知りました。私が一番衝撃を受けたのは、コシヒカリの父「農林一号」を開発した農業研究技師が亀岡の人だったことです。その人の名前は並河成資。敗戦直後の食糧危機を救った「救世主」であり、「早場米の父」と称えられているそうです。今考えるとこの人がいなければ米の品種改良も行われず、今のおいしいお米もなかったでしょう。そんなすごい人が亀岡にいたと知って、亀岡をもっと良くしていきたいという気持ちがまた強くなりました。他にも、センター内では、栄養化の高いおいしい野菜を作るために肥料の量を変えたり、日当たりを変えたりするなどさまざまな条件で野菜を作り実験をされていました。センターの方によると実験で分かった良い育て方は農業をされている方に伝え、実践してもらっているそうです。確かに、今は外国からの安価な輸入品が多く店に並ぶため、日本の農産物をブランド化して、商品競争力を高める必要があると言われていました。そのことを考えると、センターの役割は日本の農産物の将来にとってすごく大切なものなのだと思います。

実は、私の親戚にも市場に出回らない特定のレストランでしか味わえないトマトを作っている方がいます。しかし、その方の子供は農業をせず他の仕事をしています。最近では、このような家庭が多くなってきて、年々、農業に携わる方たちの高齢化が進んでいるという現

状があります。このような問題は、中学生の私達は普段あまり考えない問題ですが、日本の将来に関わる大切な問題です。このような問題をこれからの未来を作っていく私達はもっと真剣に考える必要があるのではないのでしょうか。

私は、亀岡という自分のふるさとが大好きです。だからこそ、亀岡をもっともっと良くしていきたいという気持ちがあります。そのために私達が出来ることが何でしょうか。地元の野菜を買う。地元の役に立つ勉強をする。

他にもたくさんあると思います。テレビでは、農業を企業化してブランド野菜を作っている所を見たこともあります。実際、亀岡でも企業ではありませんが小さな農業グループとして馬路大納言という小豆を守り、地元の小学生に作り方を教えに行ったりもされています。決して大きな目立つ活動が全てではありません。小さい地味なことからコツコツ積み上げていくことで、地元役に立つこともできます。私は、そんな亀岡がこれからもずっと自然豊かで誰からも愛される、そんな町だったらいいなと思います。私のふるさとを、もっともっと好きになりたいから。